

## 高速実験炉「常陽」臨界30周年記念報告会における祝辞

原子力委員会委員長 近藤駿介

高速実験炉「常陽」が1977年に初臨界を達成して以来今日までの30年間、関係者におかれましては、この炉を用いてナトリウム冷却高速増殖炉の固有安全特性や燃料・材料技術を実証しつつ、その運転・保守経験を蓄積し、同時に、マーク炉心からマーク炉心、マーク炉心と段階的に炉心特性を高度化しながら、高速増殖炉の燃料・材料や核融合炉用材料の研究開発活動に対して優れた高速中性子照射環境を提供してきました。しかも、特筆されるべきは、こうした様々な取組が大過なく着実に行なわれてきたと評価できることです。そこで、まずは、このことを可能にしてきた皆様の今日までのご尽力に対して心から敬意を表するとともに、そうして今日の日を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

また、この炉の建設段階から今日に至るまで、動力炉核燃料開発事業団、核燃料サイクル開発機構、そして日本原子力研究開発機構と組織名称は変わりましたが、そこに属する関係者のこの原子炉に係るこのような取組を、内外において心穏やかにしてはられない出来事が一度ならず発生したにも関わらず、長年にわたって暖かく見守ってこられた茨城県、大洗町、銚田市の各自治体、そして何より施設周辺の住民の皆様のご理解とご協力に対して、敬意を表するとともに、心から御礼を申し上げたく存じます。誠にありがとうございました。

さらに、本日は、フランス、米国等、海外における高速増殖炉の研究開発推進組織から、関係者のご来臨を得ています。皆様には時に先輩として、時に同僚として、この原子炉の安全で効果的かつ効率的な運転のためにご助言をいただいたと理解していますところ、我が国政府として厚く御礼申し上げます。

さて、我が国は、2100年頃までの世界の原子力利用の進展を展望して、高速増殖炉とその燃料サイクル技術の研究開発を2050年頃の実用化を目標に、安全性、信頼性、経済性、環境適合性、核拡散抵抗性などに関して性能目標を定めて推進しています。21世紀後半の世界のエネルギー供給市場においてはこれらの性能目標がいかにあるべきか、温室効果ガスの排出量が小さいことは不可欠として、これらが現在技術の特性より一段と高い水準であるべきは当然としても、太陽光発電技術、風力発電技術の専門家は原子力技術に追いつき、これを追い抜こうと必死の努力を続けていますから、これなら市場において優位になると分かっている水準が確定しているわけではありません。

したがって、原子力委員会は、関係の皆様に対して、この性能目標を適宜に見直しつつ、それを満足できる技術体系を用意することを目指すことをお願いしています。而して、この研究開発の一つの重要課題は優れた燃料・材料の開発

であり、この活動にとって、常陽のような原子炉が提供する高速中性子照射場は必要不可欠です。勿論、この照射場とて、将来においてより性能のよい照射場を提供する原子炉が現われない保証はありません。したがって、この原子炉においても、価値ある存在と評価される照射環境を提供し続けることができるよう、改善努力を継続的に重ねていくべきでしょう。

私は、原子炉はそのシステム特性や構成要素固有の物理的特性と関係者の手塩のかけ具合で人間のように青年期、壮年期、成熟期があり、この間、一日、一日、その性質を絶対的にも相対的にも変えていくものと理解しています。ご関係の皆様には、この性質とその変化、そしてその拠って来るところの正確な理解を踏まえて、絶えずこの原子炉を安全かつ安定に運転して、原子力研究開発の内外の利用者に良質の照射場を提供していく努力を重ね、公的投資を最大限に有効活用してほしいという国民の期待に応えていかれることを強くお願いして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。